夏
池上遼一
その日はうだるように暑く
いい知れぬ臭いが人々を支
配していた……

ブーン
ブーン
ギラ
ギラ

ブーン
ブーン
ブーン
ジジジ

ジジジ
ジジジ
ジジジ
ジジジジ

昭和19年5月29日、福井県武生市に生れる。中卒。デビュー作「罪の意識」('66・9月号)
主著「男組」(雁谷哲原作)、現在「ビッグコミックスピリッツ」等に連載中

日常の中で、常人にはほとんど気づかない真理というものが在るけれども、ガロの作品にはそれがグロテスクなまでに誇張されて表現されている。まるで幽霊と対面したときのような戦慄と懐かしさを憶えて、私はこのような作品が好きである。

この外の欅の木に面した部屋に内側からすっかり窓を締めきってて君だけがいたっていうんだろう
すると室内にいつのまにか蝿が三匹翔んでるじゃないか
ブーン
君は腐ったものが室内にあるのではないかと捜しはじめる
ブーン
ブーン
ところが室内にはいくら捜してもそんなものはなかった自然に蝿が室内に発生する訳もない
君は執拗にその事を気にしはじめるんだ
ブーン
そのうち君は恐しい事を想像してしまった
ジジジジ
僕には最初から君の想像した事はおよそ見当はついていたけどね……
するとどうだろうしめきったはずの窓枠の隅が少し開いていてその隙間から一匹の蝿が室内に入ってきたではないか！
私じゃないわ

ハハハハ まったく ばかげた話だ窓の 外にその体中 蝿を集まらせた 狂人がいたって 訳さ
この近くの 汚い町にゴロゴロして いる奴なんだ暑さの ためたまたま日影を 求めて歩くうち君の 家の欅の木を見つけて この窓の下で休ん でいたんだ つまり蝿を 室内に運んだのは その狂人だった 訳だよ ただそれだけの 話だろう
東京の 自動車で 停滞している 洪水の真中に ポッンといたりする そんなときいつも 灼熱のガス塊が 頭上真近に照り つけていて 暫くすると
それを 君は何度 同じ事を…… なぜだか今までは ここで僕は 君と別れてし まうんだ…… 気がついたら
また頭が 燃えるような 感じがする するといつのまにか 僕は君の 姿を見つけ てるんだ
そして 同じセリフを 君は僕に 繰返させる……
君は何度同じ事 を繰返したら 気がすむんだ それで解決したじゃ ないか……って でも今は違う らしい

まさか君は三匹の蝿が室内を翔びまわり始めてた時外にはまだ狂人は来ていなくてそれから暫くして隙間から一匹の蝿が入ってきた時初めて狂人がそこに来て休んだのかも知れない……なんて考えているんじゃないだろうね

そうするといったい最初の三匹の蝿は何処から発生したのか？……ってくだらない事を……

疲れてるんだ君は……あんな恐しくってばかげた想像は忘れるんだ

ましてそれをはっきり確かめるなんて正常な者のする事じゃないー

そんなばかな事がある訳がない

まさか君は……

確かめるわ

ズルズル

こいつをその汚い町まで運ぶって！………どうしてもというんなら仕方がないそうだなそうすれば
君が本当にまったくくだらない想像をしていた事に気がつくだろう

この暑さで完全に精神も肉体も腐っちまったらしいよ

腐りかけた肉の臭いと蠅……吐気けがする

バタン

ここらで別な意味で二人ははっきり確かめようじゃないか

君とは偶
然にしか
逢えない
なんて
ぼくは
たまら
ないん
だ
あ
ギャイイ…!
神経の
鈍い犬だ
すっかり判
断力を失
っている
暑さのせい
だろう

まあ
臓腑が
汚い
……

それなのに
君はいつも
同じ事を
そしてきょう
は逢うなり
狂人の運搬
作業じゃ
ないか

とにかく
きょうこそ
僕は君に
はっきりした
返事を訊
こうと……

……
……

なぜ君は
この話に
なると
黙ってるん
だ……

顔が
真青
だよ

蝿よ

私の
手

まだ
蝿の
事を
!

ガタ
ガタ

僕がどんなにか蠅を嫌っているって事
君は知らなかったのか……ああ蠅が群れを！
灼熱のガス塊がジリジリと照りつけるとこういう町はまるで排泄物を処理できなくなった巨大な臓物みたいになって
あたりは腐った魚腑に似た悪臭をはなち始める
そしていたるところに青白い大きな蛆虫がかたまって這ってるんだ

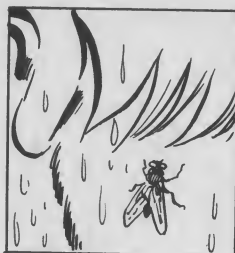
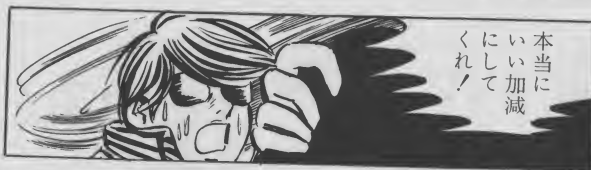
いつしかその腐れ爛れた襤褸の臓物の上を蝿が群れをつくって蝕み始めるのさ
他にもこういう場所が有るって事を僕は以前から知っていたでもいつも近よらないようにずっと避けてきたんだ
まるで自分の体の内部を眺めているようで……そしてさらに強く意識させるかのように嘔吐をもよおしてくるからだ
この流れる臭気の烈しさ！蝿の群れの唸り！
醜悪さの限りをつくしたこんな場所へ僕らを来させたのは誰なんだいや君じゃないあの狂人だあいつのせいなんだ！
たまたま隙間から入ってきたんだよあの蝿は…それなのに窓の外に狂人がいたばっかりに…
ハッ

4579
走行中に這い出ようとしたんだ まるで口から汚物を吐くように……!
不消化のまま胃から吐出された肉みたいに足蹴にしたいほど厭な顔だ
君は僕がどれほど蝿を嫌っているかって事知らなかったのか
この腐った肉の臭い蝿の翔音を忘れようとしている事を思い出させないでくれ!
最初から僕はここへ来るのは厭だったんだ…それを
あっ

バッ
ベチャッ
ブーン
ブーン
そんな奴もっと蹴って動けなくしてしまえ！
ブルオ
ギラ
ギラ
ギラ
そもそも君はこの暑さに全部の窓を最初内側からしめきっていたって事これが不思議なんだ正気の沙汰じゃないぜ

でも僕は君の言う通りにしてきた今もこの通りすっかり窓はしめたもう外には狂人はいないぜ
勿論一匹の蠅も入れないように建具の隙間には新聞紙をつめたし
もう完全に蠅が外から入ってくることは考えられない
……
ドンタン
ドンタン
さっきから三時間も過ぎたよいい加減にこんなばかなことはやめようよ！
僕はきょうこそはっきりした返事を訊こうと思って君の言うなりになってるんだ
それをいつまでじらすつもりなんだ僕がどれほど君のことを慕っているか君には……

蝿よ！あんたの首のところ
キァーーーッ

私じゃないわ
あんたがさっきあの汚い町から運んできたんだわ！

本当にいい加減にしてくれ！

僕にはわかってるんだ
君が想像した事は……
だからだから
もうやめてくれ
これ以上は！

出てってえ！

ハハ

ハハハ
ハハハ
ハハ……

ああ！
やっぱり
口から
蝿が！

君までが！
それじゃあ
あの時の僕も
アーウ
ハハハハハハ

まさか
実際に
……
僕は
信じない！

ウイーン

ウィーン
それとも
僕
眼が
いや頭が
どうか
している
のか
ジジジジジ

そんな
はずは
ない！
ジジジジジジ
ブーン
ブーン

僕の場合
も確実に
口から翔び出し
ていた
二度も見
違えるはず
がない！

ああ
厭だ厭だ
夏は
なにもかも
すぐ
腐っちゃう
わねえ

さっきの犬よ

厭らしい
蝿

まぁ
見てよ

人間まで
腐ってる
みたい！

エヘヘヘヘヘヘヘヘ

口から出た汚物……腐肉の臭いと蝿……

ヨロ ヨロ

エヘヘヘヘヘヘヘヘヘ

人間まで腐ってる……そうかやっぱり

夏になるとあの町全体は巨大な臓物みたいになって悪臭をはなち始めるそしていたるところに青白い大きな蛆虫がかたまって這っていたっけ

エヘヘヘヘ

僕はそいつを眺めると自分の体の内部を眺めているような気がしてきた

君は僕の気持なんかなんにも解ってなんかいなかったんだ！僕は外部から見える君の不透明のものだけを眺めていたかったのに…

やっぱり君は狂っていたんだ！最初から全部の窓をしめきってまでなぜこんな想像を確かめなければならなかったんだお互いに隠しておけばなんでもなかったのに

小麦色をした僕らの皮膚のしたには腐った臓物がつまっているという事を

どんな事があってもそれを僕は隠し続けたかったんだ…人が口にする言葉とは別に心の奥にあるうしろ暗いものを隠し続けているように…

いったい君は東京の何処にいるんだ！

なぜ偶然にしか逢えなかったんだ！……

ジジジ

ああ！そしていつも頭が火のように熱いときにしか……僕は狂っているのか!?

ジジジ

ジジジ ジジジジジ

魚市場のトラックとスポーツカーの衝突だ!

凄い蠅だ

気違い運転?